（別紙２）

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　伊藤　昌亮

この論文が扱う研究対象は「フラッシュモブ」と呼ばれる集合行動の一種である。「フラッシュモブ」とは「インターネットや携帯電話を通じて呼びかけられた、見ず知らずの人々が公共の場に集まり、わけのわからないことをしでかしてからすぐにまた散り散りになること」を意味する。21 世紀の幕開けとともに世界各地の都市でほぼ同時多発的に現れ、今や世界中に浸透するまでになったこの活動は、一見する限りひたすらバカバカしく、くだらなく、わけのわからないものである。しかし論文提出者である伊藤昌亮は、それが反グローバリゼーション運動に代表される「デモの文化」とアメリカ同時多発テロ事件に代表される「テロの文化」に通底する、独自の様式を持つ新たな集合行動の一形態であるととらえ、その「無目的さの意味」「無目的さの目的」の探求に取り組んでいる。

第 1 章では世界各地の「フラッシュモブ現象」の発生と形成、その普及過程を綿密に記述・検証している。

第 2 章では「フラッシュモブ現象」を多角的で総合的にとらえるための理論枠組みの構築を試みている。まず、20 世紀初頭のアメリカ・シカゴ学派のあいだで構想された「集合行動論」が跡付けられ、その特徴と限界が明らかにされている。次にそれらの限界を乗り超えるために、20 世紀初頭にデュルケムが取り組んだ「集合的沸騰」の議論にさかのぼる。そしてそこから転回された二つの理論的系譜、すなわち人類学を中心とする「儀礼的パフォーマンス」の議論と社会学を中心とする「新しい新しい社会運動」の議論を描き出している。そして両社を組みあわせた理論枠組み（儀礼と運動の交わるところ）を生みだしている。

第 3 章、4 章ではこれらの枠組みに沿って、「フラッシュモブ現象」の前史として位置づけられる「2 ちゃんねるオフ」の事例分析を進めている。本論では「2 ちゃんねるオフ」がその後の「フラッシュモブ現象」を先取りする問題意識や発想、志向性が濃密に込められたものとして位置づけられている。

第 3 章では「2 ちゃんねるオフ」のなかでも古典的であり、とくに集団儀礼としての性格を強く持つと考えられている「吉野家祭り」を取り上げ、掲示板における発言の定量的・定性的分析とエスノグラフィックな参与観察を組みあわせつつ、その「儀礼的パフォーマンス」としての意味合いを明らかにしている。第 4 章では、やはり「2 ちゃんねるオフ」の定番レパートリとして継続されている「24 時間マラソン監視オフ」を取り上げ、テキスト・マイニングを用いた内容分析によって、その「新しい新しい社会運動」としての意味合いを考察している。

以上の二つの章で明らかにされた知見をもとに、終章では序章に対する答えと、今後の展望が語られている。

このような論文とその概要の発表を受け、審査の質疑応答ではおもに次のような議論がなされた。箇条書きにしておく。

（１）フラッシュモブ現象に関する、おそらく世界でももっとも詳細な記述と分析に取り組む研究である。しかもその記述に終始するのではなく、一見インターネットや携帯電話などの発達によって生じた、とるに足らないおかしな現象と思われがちなことがらから、あらゆるもののデジタル化、グローバル化が信仰する 21 世紀社会の深層構造の変化を読み取ろうとする着眼点、パースペクティブは秀逸である。

（２）デュルケムにまでさかのぼって人類学的、社会学的な理論的、思想的知見を渉猟し、集合行動の持つ両義的、あるいは多義的な意味合いをバランスよくとらえ、安直な単一要因論になることを回避している。基本的に人間がなぜ集まり、なぜ運動を転回するかについて、真正面から取り組んで真摯に答える姿勢が高く評価できる。また従来の Computer Mediated Communication(CMC)研究がかかえてきたいわゆる「二世界問題」を克服する道筋を明確に示している。

（３）一方、儀礼と運動についての理論枠組みを構成する諸概念（たとえば社会秩序の創造と破壊、実態的行動と儀礼的行動など）を子細に検討すると、それらが生みだされる思想的文化的背景が十分に検討されているとはいえないところがある。また儀礼論には近代社会を分析するための限界が大きいのではないかという指摘もあった。

（４）そのことと連関し、理論や概念と個別事例の結びつき方がスムーズではない部分がある。すなわち第 3 章において個別事例をやや理論枠組みに引きつけすぎているのではないか。それと連関して、個別の現象をたんに匿名の対象として扱うのではなく、特定の人々の集合行動を継続的にとらえていく視点も必要ではないかといった問題である。

以上のような指摘があったが、総じてこれまでの CMC の限界を乗り超え、近代社会学や人類学の古典的な問題意識をくみ取りつつ、21 世紀社会の新たな諸現象をとらえようとする姿勢はスリリングであり、集合行動論、CMC、社会学、メディア論といった領域を横断する新たな領野を開拓できる地力を秘めている。

そのため本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。

（２０００字程度）